Lost Cause

蒼山　ケイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｏｓｔ　Ｃａｕｓｅ

【Ｎコード】
Ｎ３６４０Ｔ

【作者名】
蒼山　ケイト

【あらすじ】
二十八歳と二十五歳の男女の、遠距離不倫の話です。
自分のブログからの転載です。

（前書き）

軽い性描写があります。

彼女は服を脱ぎながら、「カーテン閉めて」と小声で言った。
言われた通りにしたけど、部屋はまだ明るかった。時計の針はさっき三時を回ったところだ。
僕の頭の中ではＢｅｃｋの『Ｌｏｓｔ　Ｃａｕｓｅ』が、目の前の出来事を押し流すように流れていた。
彼女は何を考えてたんだろう。旦那さんについた嘘でも思い出してたんだろうか。

僕らはついさっきまで外を歩いていた。
彼女は僕の隣で時々鼻をすうすうと鳴らした。
「鼻炎なの。ずっと」
「大変？」
「慣れたから平気」
僕は彼女が見たいという、古めかしいビルに彼女を案内した。ガイドブックに載ってるらしい。地元の人間にとっては、何が楽しいのか分からない。ただ昔に建てられたっていうだけじゃないか。
彼女はデジタルカメラで建物の外観を何枚か撮影した後、カゴバッグから折れ曲がったガイドブックを出してペンで印をつけた。そしてそれを僕に見せて、「タビノオモイデ」と言った。

その後僕らは売店でソフトクリームを買って、池のほとりにあるベンチに座った。
ソフトクリームは大して美味しくなかったけど、『ねえ、これすごく美味しくない？ミルクの味が濃厚っていうか、ちゃんと作ってる感じ。スーパーには売ってない。ねえ、思わない？』と彼女がしつこく言うので、僕は数えていた鯉を諦めて、案外美味しいのかもしれないと思い始めた。

山の緑が深かった。ロープウェーがゆっくりと動いてるのが見えた。太陽は一週間ほど前から夏への助走状態に入って、ぐんぐん加速してる。今年も無駄に暑くなるに違いないと僕は思った。

彼女はソフトクリームを舐めながら、二年前に人面魚を見た話と、三年前に僕と初めて会った時の話と、五年前に医者と付き合っていた頃の話をした。時々思い出したようにさっきの話題に戻るので、僕はどれが一番古い出来事なのかごちゃごちゃになってしまった。

彼女が付き合っていた医者は、皮膚科の開業医で右頬に大きな痣があって足のサイズが３０センチでピアノが上手かったらしい。それが珍しい医者なのかどうかは分からないけど、世の中には実にいろんな人間がいる。

「私がその時ハタチで、相手が四十。すごいでしょ」

「すごいね」と僕は言った。「医者とデートなんて贅沢出来そう。外車の助手席とか乗ったことある？」

「ないの。その人免許持ってなかったから。おかしいでしょ。医師免許持ってて運転免許持ってないの」

「医師免許持ってたら他には何も要らない気もするけど」

「乗ったことある？外車」

「ないよ」

「持ってる？車」

「持ってるよ。でも人を轢いてから乗ってない」

「うそでしょ？」

「うそだよ」

彼女はそれから僕のリクエストに応えて、今の旦那さんと結婚するきっかけを話してくれたけど、それは高校の同窓会というありふれたものだったので、いまいち面白くなかった。

僕らは池を離れて通りへ出て、短い横断歩道を渡って竹林の中を歩いた。

僕は幼い頃から竹林の中を歩くのが好きだ。四方八方から押しつぶされそうになる感覚がたまらない。それを彼女に言うと、彼女は

「なんとなく分かるわ」と言った。本当は分かってなかったかもしれないけど、それはそれで構わなかった。
竹林を抜けて小さな通りに出るといくつかの土産物屋が並んでいた。彼女はそのうちのひとつに入り、僕は外で友人にメールの返信をした。恋愛相談を一週間ほど放置していたのだ。僕に相談するのが間違いだと気付いて欲しかったけど、そこまで勘の良い奴じゃないと先に僕が気付くべきだった。
店から出てきた彼女は僕に、ガラス玉のキーホルダーをひとつくれた。きれいな水色の中に黄色のラインが入っていた。ありがとうと僕は言った。
その後僕らは大きな通りへ出た。一分も経たないうちに彼女がタクシーに手を上げ、宿泊先のホテルの名前を告げて十五分ほどでこの部屋までやって来た。

僕らは夜の七時過ぎまでセックスをした。
彼女は二度目のセックスの最中、僕に『リリィって呼んで』というよく分からない要求をしてきた。僕は言われるままに、彼女をリリィと呼んだ。もっと呼んでと言われてそうしてるうちに、この人は本当にリリィという名前なんじゃないかと一瞬だけ思う。けれどそんなことはあるはずがなかった。藤田美佳という名前だと知っていたからだ。
彼女は体位や愛撫して欲しいところも具体的に口にし、僕が応えるとその度に身体を敏感に反応させた。セックスの最中にも、僕の頭の中にはまだ『Ｌｏｓｔ　Ｃａｕｓｅ』が流れていた。今朝一回聴いただけなのになと思った。

浅く眠って目を覚ました時、彼女はもう白いブラウスにデニムという姿に戻って椅子に座っていた。
枕元の時計を見ると八時過ぎだった。部屋には淀んだ空気が充満していた。頭が少し痛んで、良くない寝方をしたと思った。

「起きた？」
「うん」
「ねえ、ラーメン食べたいんだけど、近くにある？」
「ラーメン？」と僕は言った。
部屋の隅でぼんやりと浮かぶテレビ画面には、二人のお笑いタレントがラーメンを食べる姿が映っていた。
僕はこざっぱりとしたレストランにでも行くつもりにしていたけど、特にラーメン屋に反対する理由もなかった。考えてくると言ってシャワーを浴び、タオルで身体を拭き終わる頃に思い付いた店に彼女を連れて行くことにした。
ホテルを出ると少しひんやりとしていた。彼女はブラウスの上に着た薄手のカーディガンの袖を伸ばした。僕はナイロンのブルゾンのジップを首元まで上げた。
歩いているうちに小雨が降ってきた。ラーメン屋まではもう少しかかりそうだったので、近くにあったローソンでビニール傘を一本買って続きを歩いた。彼女は傘を持つ僕の右手に両手を添えて小さくなった。そして時々空を見上げた。
「明日何時の新幹線？」
「んー、朝九時台かな」と彼女は鼻をすすりながら言った。
「早いね」
「星空楽しみにしてたのにな。あんまり見えないね」
「星空？」
「そう。こっちは星がきれいだってメールくれたでしょう」と彼女は言った。僕にはそんなメールをした記憶がなかった。でもそう言うからにはしたんだろう。
「それならまた見に来ればいい」
「来たら来たで困るくせに」と彼女は小さく笑った。
チャーシューメンを食べて彼女にさよならを言って、メールが来たのはそれから三か月後だった。

仕事を辞めたこと、茶色のオーロラシューズを買ったこと、そしてあのソフトクリームが美味しかったことが書かれてた。
『こっちにはないわ。あの味』。ソフトクリームの回りがきらきら光ったり、その近くを魚が群れを成して泳いでたりする、とても器用なメールだった。
二週間経った今も、僕はまだ返事を送っていない。

（後書き）

初投稿です。
これからも少しずつ投稿したいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3640t/

Lost Cause

2011年5月18日16時10分発行